

大学生のスピーチにおける使用語彙・使用文型の分析

—日本語母語話者と日本語非母語話者の比較から—

富 谷 玲 子

1. 研究目的

近年、大学生の学習・研究活動を支える日本語に対する関心が高まっている。学部留学生教育に焦点を絞るならば、大学初年度教育の課題であると同時に上級日本語教育の課題として位置づけられる。本稿では日本語教育の立場から、学部留学生対象の日本語教育の現状と問題点を検討し、学術場面での日本語使用実態を分析した上で学部留学生対象の日本語教育プログラム設計の基礎データを提示する。

日本国内の留学生は 1980 年代から激増したが、大学学部留学生対象の日本語教育はまだ十分整備されているとはいえない。日本語学習者人口に占める学部留学生の割合も上級学習者の割合も低く、その結果「大学での学習・研究活動を支える日本語教育」への関心はなかなか広がらず、担当者がプログラム開発の必要性に迫られて個別に取り組まざるを得ない状況が続いたのである。この状況を大きく変えたのは平成 14 年（2002 年）の日本留学試験の実施である。日本留学試験によって「大学での学習・研究活動を支える日本語」の必要性が大学入学準備段階の日本語教育担当者にも広く共有されるようになり、現在では中上級レベルの日本語教育における主要課題と認識されるに至った。

学部留学生のための上級日本語教育プログラムは、留学生が激増した 1980 年代後半から開発され続けている。そのシラバスを見ると、要約・ノートテイキング・情報検索・調査発表・スピーチ・ディスカッション・ディベート・レポート作成など、スキルによって構成されていることが分る。日本語教育プログラムは、対象となる学習者のニーズ調査と目標言語調査の結果に基づいて設計することが基本とされているが、学部留学生対象の

上級日本語コースの場合、ニーズ重視の傾向が強く目標言語分析に関しては極めて大まかな把握しかされていない。その原因は、上級学習者数が少ないことに加えて、学術場面における高度で複雑な日本語の使用実態が記述しにくいことにもあるように思われる。日本語母語話者 (native speaker, 以下 NS と記す) の場合も日本語非母語話者 (non-native speaker, 以下 NNS と記す) の場合も、使用言語に比べはるかに広範囲で多量の理解言語を習得しているのが普通であり、使用言語は理解言語の一部分にすぎないということが知られている。しかしながら、日本語における両者の違いについての具体的な分析結果があるわけではない。

本稿では、まず日本語使用実態に関する研究の現状について述べ、次に「学習・研究活動を支える日本語教育」の現状と問題点について検討する。その上で学術場面での大学生の日本語使用実態の一端を解明することを目指し、大学学部生の自発性の高い自然発話としてのスピーチを分析する。スピーチは複雑な言語行動であり、そのすべてをここで分析することは不可能である。そこで、大学生のスピーチの中で使用されている語彙と文型、スピーチ開始部と終結部の談話構造のみに焦点を絞って分析することとする。また、大学生という同条件の下で日本語母語話者 (NS) のスピーチと日本語非母語話者 (NNS) のスピーチを比較し、日本語使用における共通点と相違点を検討する。「学習・研究活動を支える日本語教育」に必要な基礎データを示すとともに、上級日本語教育への示唆を行いたい。

2. 先行研究

2.1. 日本語使用実態に関する先行研究

日本語学習者 (NNS) の日本語使用実態に関する研究は最近になってようやく大きな進展を遂げた。NNS の書き言葉を対象とした研究では、国立国語研究所の「日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対訳データベース」が大きな成果として挙げられる。これはアジア 10 カ国から日本語学習者 1100 名分のデータを収集し作成した日本語作文とその母語訳との対訳データベースで、2001 年 3 月に公開された。NNS の話し言葉を対象とした研究では、NNS と NS の会話を収集した「インタビュー形式による日本語会話データベース」も公開されている⁽¹⁾。この他、話し言葉に関する研究としては NNS の児童を対象とした語彙習得研究がある (一二三 1996, 松本 1999)。また、NNS と NS の接触場面での日本語使用実態

の研究の中で最近のものとしては、交換留学高校生と日本人高校生の問題解決場面の談話の分析がある（岡部 2002）。

日本語母語話者（NS）の日本語使用実態に関する研究成果としては、2004 年の国立国語研究所「日本語話し言葉コーパス」の公開が挙げられる。20～60 歳代の話者の自発音声（学会講演，模擬講演，インタビュー，課題志向対話，自由対話など）と朗読の総計 660 時間が格納された貴重な研究成果である。これとは別に、東京，山形，大阪の中学校と高校における敬語の使用実態に関する調査が同じく国立国語研究所で行われ，その結果が公開されている。この他，児童の作文使用語彙に関する研究（国立国語研究所 1989）もある。話し言葉の特徴の一部分に焦点を絞った研究では，講演・電話におけるフィラーの研究（山根 2002），電話の談話構造の研究（岡本 1990）などがある。

他に，特定分野の文献に関する語彙調査（安藤 2002，村岡他 1997），児童生徒対象の日本語教育のための基礎語彙調査（工藤 1999）も行われている。

これらの日本語使用実態に関する先行研究は日本語教育のプログラム開発に必要な基礎データであることは言うまでもないが，いずれも学術場面における大学生の日本語使用実態を対象とした研究ではないため，「大学での学習・研究活動を支える日本語教育」のプログラム開発の基礎データとすることはできない。

2. 2. 「大学での学習・研究活動を支える日本語」を目的としたコース・教材

学部留学生の日本語教育担当者は，日常会話と学術場面での日本語とのギャップに苦しむ留学生を目の当たりにし，必要に迫られて「学習・研究活動を支える日本語」の学習を目的とした上級日本語プログラムの開発を行ってきた。「大学での学習・研究活動を支える日本語」は，アカデミック・スキル，アカデミック・スキルズ，スタディー・スキル，スタディー・スキルズ，キャンパス・ジャパニーズ，大学生の日本語，学術日本語，アカデミック・ジャパニーズなどと呼ばれている。この多様な用語からも，同一の日本語教育プログラムの開発を目指しながらも，基礎研究の蓄積もなく共通理解ももたないまま担当者が個々の教育現場で取り組み続けてきたという状況を窺い知ることができる。「アカデミック・ジャパニーズ」は

これらの用語の中で最も歴史が浅いが、日本留学試験のシラバスに記載されており、試験が 2002 年度より実施されていることから、今後は「アカデミック・ジャパニーズ」に収斂することが予想される。

「アカデミック・ジャパニーズ」の教材として最も早く出版されたのは、1988 年の「講義を聞く技術」である⁽²⁾。これは上級レベルのノートテイキングのスキル養成を目的とした教材である。その後多種多様な教材が出版されたが、いずれもスキルシラバスであるという点で共通している。スキルとしては、ノートテイキング（聴解と要約の複合スキル）、速読、レポート（調査・読解・要約・作文の複合スキル）、スピーチ（調査・読解・要約・口頭表現の複合スキル）、情報検索、調査発表（検索、要約、口頭発表の複合スキル）などで、単独のスキルのみを扱うテキストと複数のスキルを組み合わせる総合的なテキストとしたものがある。学習者の多様なニーズ・関心への細やかな対応、学習者の個別性に対処するためのトピックの選定など評価すべき点も多い。日本事情と組み合わせることにより、日本に関する背景知識を補強することによって日本語能力全体を高めることを狙ったテキスト、上級文型教育を組み込んだテキストもある。スキルの質的向上を明確に目指した点、多様なニーズに細やかに対応すべく工夫を凝らしている点などは評価に値するが、一方で、具体的な到達目標が明示されているわけではなく、モデルとなる日本語に関する記述もないといった問題点もある。日本語使用実態の基礎調査が行われないうまま、教育現場のニーズに突き動かされるようにして開発が進められてきたためである。

2002 年の留学生試験の実施に伴い、ようやく「大学での学習・研究活動を支える日本語」に関する本格的な検討が始まり、2004 年日本語教育国際研究大会⁽³⁾では「アカデミック・ジャパニーズ」そのものをテーマとして掲げたワークショップも開かれた。しかしながら、その資料に『アカデミック・ジャパニーズ』という表現は、『日本留学試験』を導入する報告書が、日本留学試験の『日本語』科目の性格を、『アカデミック・ジャパニーズ（大学での学習・生活に必要な日本語力）を測る』としたことから発している。」「アカデミック・ジャパニーズという、ともすると『専門科目を学ぶのに必要な語彙・表現力の育成』に目が向きがちだが、筆者は、専門科目学習に分化する以前の『教養的な問題提起力・思考力・探究力・発信力』の育成こそが重要である、と考えている。』⁽⁴⁾とあるように、未だに用語もその定義・概念規定も曖昧なままである。

2.3. 上級日本語教育に関する先行研究

上級日本語教育とは何かを吟味すると、実は曖昧な点が多いことに気づかざるをえない。上級に関して確実に広く合意が得られているのは、日本語能力試験一級が上級レベルであるという点である。その目安とされるのは、学習時間数約 900 時間、『日本語能力試験出題基準』の一級漢字表、一級語彙表 (10000 語)、「文法的なく機能語」の類——一級 (サンプル——)⁽⁴⁾ のみである。さらに詳細に検討するならば、明確な基準として提示されているのは一級漢字表・語彙表のみであり、その他の領域はレベル基準も明示されていないことに気づく。このような状況にありながらも、日本語能力試験がこの『日本語能力試験出題基準』に基づいて毎年全世界で施行されているため、この基準が事実上世界的合意として機能しているのである。日本語能力のレベル認定を試みる場合、現在のところこれが唯一の基準である。また、2002 年の日本留学試験実施までは日本語能力試験一級が留学生の学部入学の前提条件と考えられてきたこと、日本留学試験実施以降も大学での日本語教育担当者の多くが日本語能力試験一級を大学生の基礎日本語力の目安としていることから、大学における学習・研究活動を支えることを目的とした日本語教育では、日本語能力試験一級以上のレベル、即ち上級レベルを対象とすることとなる。

文字・語彙に関しては、『日本語能力試験出題基準』に級別リストが掲載されており、語のレベル認定が可能である⁽⁵⁾。しかし文型に関しては『日本語能力試験出題基準』にはサンプルがあるのみでレベル認定が非常に困難な状況にある。その背景として、初級に比べて中上級では文型の整備が大幅に遅れていたことが挙げられる。ようやく 1990 年代になって、現代語 (日本語) に関する文法研究からの応用として中上級文型・機能語の整備が急速に進み、文型辞典という形で教育実践上利用価値の高い成果が日本語教育へ還元された (駒田他 1990, グループ・ジャマシイ 1998, 白川 2001)。しかしながら、いずれの文型辞典にもレベル記述がなく、また使用場面や使用頻度に関する記述もないため、中級文型と上級文型を識別することは不可能である。レベル記述のあるものとしては、『どんな時どう使う日本語表現文型 500 中上級』が挙げられるが、これは日本語能力試験一級・二級に対応した教材であって、レベルの判定基準がどのような基礎研究の成果に基づくものなのか、その根拠は不明瞭である。このように、上級文型に関する合意は現在のところなく、個々の文型についてそのレベルを判定す

ることは、厳密に考えるならばほぼ不可能である。

以上の先行研究の概観から、学部留学生を対象とした「学習・研究活動を支える日本語教育」では、大学生の日本語使用実態、特に学術場面における話し言葉の使用実態に関する基礎研究の成果がなく、また上級レベルの学習項目に関する基本的合意もないままプログラム開発が行われてきたことが明らかになった。このような状況を改善するためには、基礎研究として大学生の日本語使用実態の分析を蓄積することが必要不可欠であると考ええる。

3. 研究方法

3.1. データ

大学学部生の学習・研究活動における話し言葉の実態を分析するために、スピーチをデータとする。データ収集に関しては2つの方針をたてた。

- (1) 大学生の普段の学習・研究活動での日本語使用にできる限り近い、自発性の高い自然発話を収集する。
- (2) 同条件下で、NS と NNS の大学生のスピーチのデータを収集する。

以上の方針に基づいて、NS と NNS の大学生が参加する授業での制限時間 1～3 分のスピーチ 20 本をデータとした。NNS は日本語能力試験一級取得レベルの漢字圏出身の学部留学生 1～3 年生 12 人、NS は日本語を母語とする学部 3～4 年生 8 人である。

スピーチはディベート対戦として行ったものである。ディベートにはチーム内で個人が担当する役割があり、担当箇所の違いからデータとしての条件の均質性を厳密に保つことは困難である。しかし、ディベートという枠の設定によってスピーチの目的と論点・構成が明確になることから、全員がスピーチに十全に参加することが可能になり、勝敗を決するというゲーム性により参加者の動機付けを維持できるという利点もあり、自発性の高い自然発話としてのスピーチを引き出すことが可能になると考えた。

ディベートでは NNS 3 人と NS 2 人の 5 人で 1 チームを作り、1 回につき 2 チームが対戦し 10 人がスピーチを行った。スピーチの制限時間を守ること、視覚的資料はいっさい聴衆に提示せずに音声言語のみによるスピーチを行うことをルールとして定めた。ディベートは両チームの合意によって選択したテーマで対戦することとした。授業時間内にも授業外にもデ

イベート対戦の準備のための時間を十分に確保できるようにした。ディベートは同一採点方法を用いて聴衆（クラスメート）全員が採点しその集計結果に基づいて勝敗を決定した。以上の条件で行ったディベート2回から得られた20本のスピーチ (NS 8, NNS 12) を本研究のデータとした。データとして用いるスピーチの条件をまとめると以下のようになる⁷⁾。

- ① 内容 : テーマと立場が予め設定されている。
- ② 形式 : 立場表明して論拠を述べるという形式をもつ。
- ③ サイズ : 制限時間は1～3分。
- ④ 媒介物 : 視覚的媒介物を用いない音声のみによるスピーチである。
- ⑤ 教師の介入 : 事前準備段階と実践段階では教師は直接的訂正を行わない。
- ⑥ テーマ : 二つのテーマ。
 A 「ボランティアを大学の必修科目とすべきだ」
 B 「お酒とたばこの自動販売機を撤廃すべきだ」
- ⑦ 役割 : ディベートでは「立論・質問・答え・反駁・まとめ」の5つの役割の中から一つの役割を担当する。
- ⑧ 準備 : スピーチ用メモ・原稿の準備の有無はスピーチ担当者の判断に任せる。

⑥～⑧の点では、スピーチの条件は統一できていないが、本研究の目的は日本語使用実態を記述し分析することであり、実際の大学生の日本語使用にできる限り近い自発性の高い自然発話を収集することを目指しているため、このような条件の下でデータを収集し分析することとした。

データ収集に先立ち全参加者の許可を得た上で録音録画した。録音録画データは、宇佐美 (1997) に準拠して文字データ化し、トランスクリプトを作成した。フィラー、ポーズ、言い間違い、意味不明な音もできる限り正確に記述することとした。なお、データ内の人名はすべて仮名に書き換えた。

3.2. 分析方法

大学生のスピーチでの日本語使用実態を知ることが目的とするため、スピーチの内容面ではなく言語面に焦点を絞って分析することとした。「理解できる日本語」と「使用（産出）できる日本語」の差について分析するために、可能な範囲でレベルの判定も行った。分析の視点として以下の3点

を設定した。

- i スピーチで使われた語彙レベル
- ii スピーチで使われた中上級文型
- iii スピーチの開始部・終結部の談話構造

語彙レベルの判定のツールとして、以下のものを用いた。

- a. 『日本語能力試験出題基準』「1, 2 級語彙表」
- b. Reading Tutor 語彙チェッカー⁽⁸⁾

語彙の級別占有率は、Reading Tutor 語彙チェッカーを用いて測定した。この語彙チェッカーでは、フィラー、ポーズ、言い間違い、意味不明な音は、四級から一級のリストにない語彙として「リスト外語彙」に分類される。そこで、語彙レベル認定するために上記箇所をトランスクリプトから削除した上で級別占有率を算出することとした。語彙チェッカーで得た結果は、『日本語能力試験出題基準』を用いて再チェックを行った。

中上級文型のレベル認定は、全文型のレベルが記載されている文献・先行研究がないため、非常に困難である。部分的にレベル別記述のある文型リストは以下の3点である。

- c. 『日本語能力試験出題基準』「文法的な〈機能語〉の類
— 二級 (サンプル) —」
- d. 『日本語能力試験出題基準』「文法的な〈機能語〉の類
— 一級 (サンプル) —」
- e. 友松・宮元・和栗 (1996) の 500 文型のリスト (pp. 223~230)

c d はサンプルにすぎず、e は教材である。このような状況から文型のレベル認定は網羅的かつ正確に行うことは不可能である。本研究では、c d のいずれかにレベルの記述がある文型に絞って分析対象とし、レベル判定を行った。

4. 結果

4. 1. 大学生のスピーチにおける使用語彙

大学生自身が主体的な判断で産出した自然発話としてのスピーチをデータとして得ることができた。ディベートの実戦である点から動機付けは十分であり、視覚的資料を一切用いない純粹に音声のみを媒介とする独話としてのスピーチが得られた⁽⁹⁾。NNS のスピーチは十分に内容伝達可能であったが、聞き手が内容を理解する際に若干負担を強いられる面もあった⁽¹⁰⁾。

大学生のスピーチからフィラーと言い間違い箇所を除いたものを 100% として、語彙のレベル別占有率を Reading Tutor の語彙チェッカーを用いて産出したところ、初級語彙（日本語能力試験三～四級語彙）が全体の約 75% を占め、中級語彙（二級）が約 15%，上級語彙（一級とリスト外語彙）は 10% 程度に過ぎないことが分った⁽¹¹⁾（表 1）。NNS，NS で使用語彙レベルに関する大きな違いもテーマによる大きな違いも見られず，個人による特徴はややあるものの，全体的にレベル別語彙使用状況は一致傾向にあることが分った（図 1，図 2）。一級語彙の使用率が 2.0～3.7% と極端に低く，リスト外語彙は一級語彙を超えて 6.2～8.4% 使用されている点が共通する特徴である⁽¹²⁾。リスト外語彙は，テーマと論点に関連するキーワードが大部分を占め，意味的にみるとネットワークを形成していることが分った（図 3，図 4，資料 1）。

表 1 スピーチ全体における級別語彙占有率 (%)

	リスト外	一級	二級	三級	四級	上級	中級	初級
NNS平均：テーマA	7.5	3.5	11.6	12.5	64.9	11	11.6	77.4
NNS平均：テーマB	7.1	2	15	12.4	63.5	9.1	15	75.9
NS平均：テーマA	6.2	3.7	10.9	12.9	66.3	9.9	10.9	79.2
NS平均：テーマB	8.4	2.3	15	11.8	62.5	10.7	15	74.3

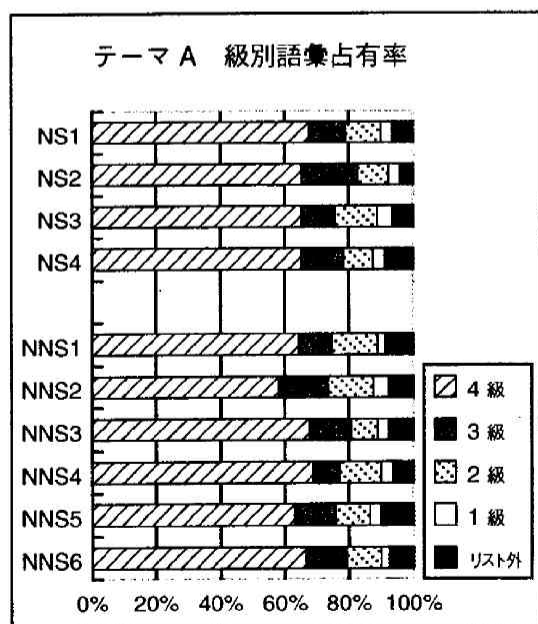


図 1

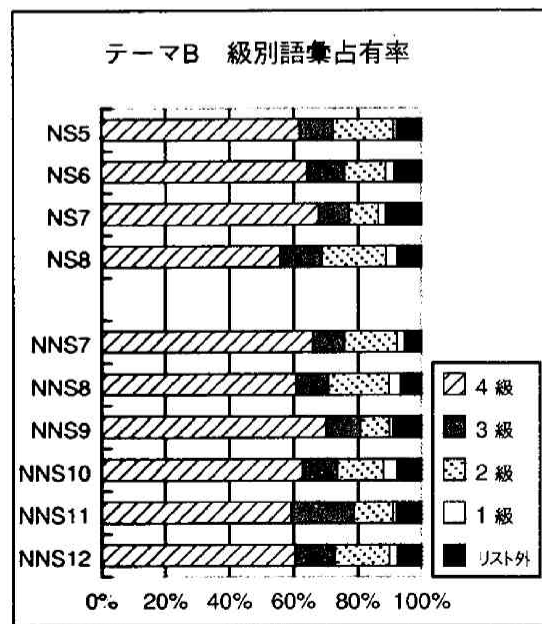


図 2

図3 テーマA「ボランティアを大学の必修科目とするべきだ」語彙ネットワーク

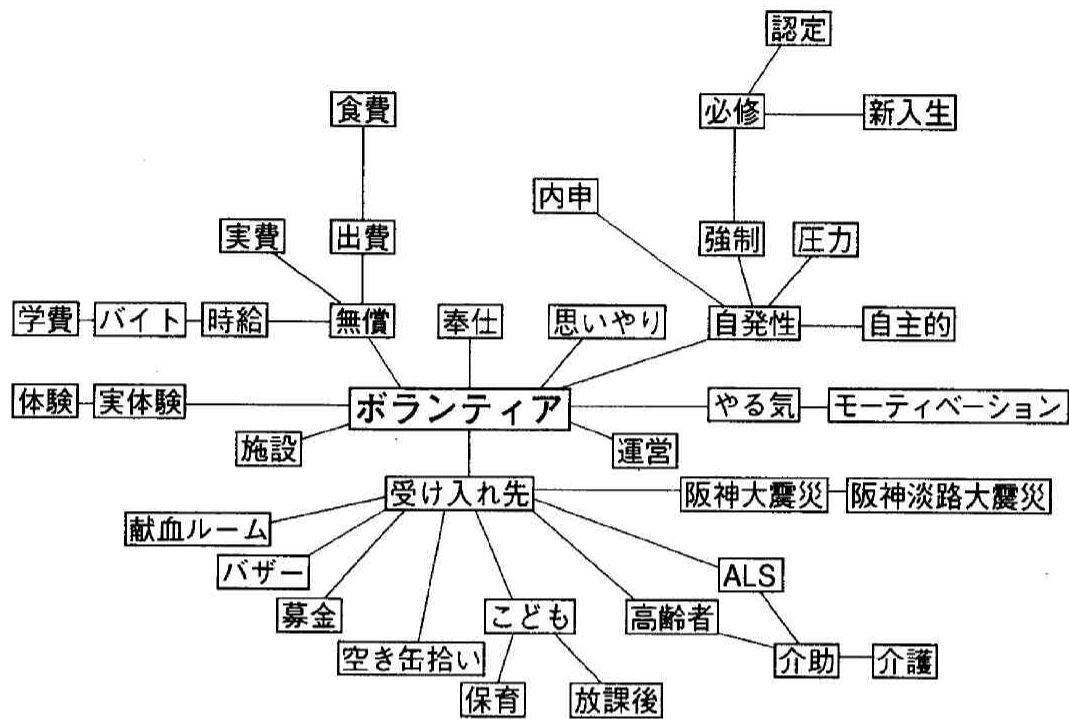
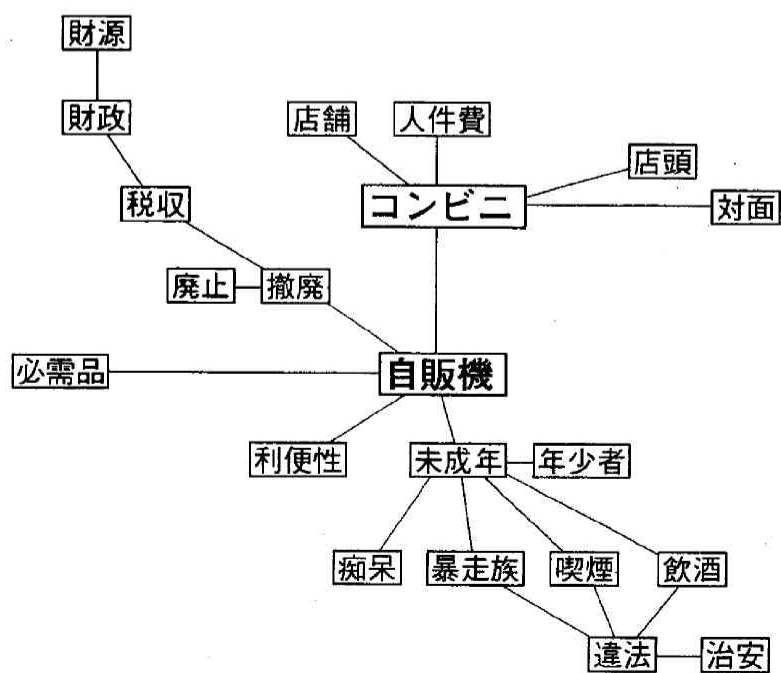


図4 テーマB「お酒とたばこの自動販売機を撤廃すべきだ」語彙ネットワーク



4.2. 大学生のスピーチにおける使用文型

レベル認定が可能な範囲で中上級文型を調べた結果、二級文型 40、一級文型 1 のみがスピーチで使用されていたことが分かった。使用頻度には個人差が見られた。NNS・NS 別に見ると、NNS の方が使用文型のレパトリがやや広く、二級文型 29 と一級文型 1 を、NS のスピーチでは二級文型 23 と一級文型 1 が使われていた。テーマ別に見ると、テーマ A は 30 文型、テーマ B では 15 文型と、テーマにより使われる文型の広がり異なっていた。一・二級と認定できた文型のリストが資料 2 である。

4.3. スピーチ開始部・終結部の談話構造

論点・論拠に入る前の部分をスピーチの開始部、スピーチの末尾で論点・論拠が含まれない部分を終結部と考える。

スピーチ開始部の構成要素は、挨拶・名乗り・開始宣言・前提確認・立場表明の 5 つで、その中のいくつかを組み合わせることによって開始部が構成されていた。談話の要素の発話順は一定であり、順序の逆転は見られなかった。

NNS のスピーチは NS に比べ、開始部のサイズが大きく複雑であった。聴衆に挨拶（例：「おはようございます」）をしてから開始宣言（例：「今日のテーマに入りたいと思います」）、あるいは立場表明（例：「～という立場です」）を行うという談話構造である。この他、名乗りを行っているもの、共有する前提について確認を行っているものもあった（表 2）。NS のスピーチ開始部を見ると、8 人中 5 人が開始宣言・立場表明からスピーチを開始しており、開始部を全く持たないスピーチもあった。NNS が挨拶や名乗りによって聴衆との対人関係を構築するところからスピーチを開始しているのに対し、NS は聴衆との関係は既にあるという前提でスピーチを開始している。開始部のサイズが最も大きかったのは次に示す NNS のスピーチである。

- 【挨拶】 みなさん、おはようございます。
- 【名乗り】 今日のテーマについての私は反対側のヤンと申します。
- 【挨拶】 よろしくおねがいします。
- 【開始宣言】 それでは、さっそくテーマにはいりたいと思います。
- 【立場表明】 今日は「***（テーマ）」、ですけれども、私たちは、ち

よっと違った意見を持っております。

終結部は開始部に比べると単純でバリエーションも少ない（表3）。終了宣言「以上です」を用いたスピーチが18で、他の2つのスピーチは「ありがとうございました」という挨拶で終結している。終了宣言の前に「よく考えていただきたいと思います」のような聴衆に対する働きかけ（訴え）が挿入されたスピーチもあった。スピーチ終結部の談話は、以上の3要素（訴え、終了宣言、挨拶）から成り、3要素の発話順序は一定であった。

データを見る限り、スピーチの開始部、終結部ともに定型的な談話構造を持つことが分った。

表2 スピーチ開始部（挨：挨拶、名：名乗り、開：開始宣言、前：前提確認、立：立場表明）

話者	NNS												NS							
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8
挨	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○			○	
名			○	○				○											○	
開			○	○				○	○	○	○	○		○	○		○		○	○
前						○			○											
立	○				○		○	○				○	○	○		○				

表3 スピーチ終結部（訴：訴え、終：終了宣言、挨：挨拶）

話者	NNS												NS							
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8
訴		○					○						○						○	
終	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
挨	○	○	○	○				○				○	○	○						

5. 考察

5.1. 使用語彙

日本語能力試験出題基準では、語彙について初級を3000語、中級を初級語彙を含む6000語、上級を初中級語彙を含む10000語を目安としている。従って、単純に考えるならば日本語能力試験一級取得者の既習語彙は初級30%、中級30%、上級40%である。ところがデータを見ると、

すべてのスピーチで初級語彙が全体の約 75%, 初中級語彙をあわせると約 90% を占めている。データは日本語を母語とする大学生と、語彙 10000 語を獲得したレベルの学部留学生のスピーチであり、自発性の高い自然発話である。20 のスピーチすべてで上級語彙の使用頻度が 10% 程度に過ぎず、初中級語彙が大部分を占めている点、注目し値する。

NS, NNS に共通して初級語彙が多用されていることから、高度な内容のスピーチを行う際にも初級語彙の運用力がその支えとなっていることが明らかになった。初級語彙には基本動詞や多義語が数多く含まれているが、『日本語能力試験出題基準』には、語彙の意味別レベル基準や用法別レベル基準に関する記述がなく、上級日本語教育においても多義語や基本動詞の扱いに関する基本方針は明確には打ち出されていない。本研究ではスピーチで使用された初級語彙に関して意味分析・用法分析を行うことはできないが、スピーチには初級語彙の高度な用法や意味が出現していることが予測される。今後、上級レベルにおける初級語彙の使用実態について分析することが必要であり、その成果を中上級での学習項目として日本語教育プログラムに組み込むことが必要であると思う。

上級語彙について見ると、スピーチではリスト外語彙が一級語彙よりも多く使われており、その大部分はテーマや論点に関わるキーワードである。このことから、キーワードとして少数の上級語彙を適切に運用することさえできれば、内容的にも充実し伝達可能なスピーチを行うことができるということが示唆される。一般に、領域ごとに使われる語がある程度限られていることも知られているが、本研究の語彙のデータからも、テーマ毎にキーワードがネットワークを形成していることが分った(図 3, 図 4)。また、2 つのテーマの間にはほとんどリスト外語彙の重なりがないことも確認することができた(資料 1)。ある分野について一般知識が豊富であればあるほどその分野での日本語の運用が容易になることは広く知られている。必要な分野の知識の獲得と連動しつつ語彙学習を行うことにより、日本語の産出能力を効果的に高めることが可能となるのではないかと思う。同時に、語彙学習ではレベルよりもニーズを優先し、戦略的に語彙ネットワークを一単位として学習順序を決定することが有効である。

スピーチに占める一級語彙の割合が非常に低いことも特徴的であった。日本語能力試験の一級語彙、二級語彙の選定には、中学校・高等学校の教科書も資料として使われており、書き言葉的な要素が反映していることが

考えられる。話し言葉と書き言葉では使いやすい語彙が異なることが予想されるが、『日本語能力試験出題基準』にはそのような区別はない。一級の語彙の中から話し言葉として利用価値の高い語を選別し、重点的に指導することが可能ではないかと思われる。

5.2. 使用文型

全スピーチで使用された中上級文型の異なり数は 41 で、うち上級文型は 1 のみである。日本語能力試験一級取得を目指す場合には中上級文型 500 以上を学習するのが普通であることを考えるならば、スピーチで使われた中上級文型は意外なほどに少ない。スピーチの話者は小数の利用価値の高い中上級文型だけを十分に使いこなすことによって、抽象的で複雑な内容の伝達を達成していたと考えることができる。

スピーチで使用された文型の種類と頻度はテーマによる違いがあり、NNS と NS の間では大きな違いは見られなかった。テーマによって文型の種類や使用頻度にどの程度の違いが生じるのかは、2 つのテーマのみのデータからだけでは判断することは難しく、今後の課題としたい⁽¹³⁾。

日本語能力試験一級取得の準備段階では、学習者は中上級文型を使った短作文練習に膨大な時間を費やす。近年日本語学の文法研究からの還元として中上級文型の整備が急速に進み文型辞典など実用的なリソースが提供されるに至ったが、教材の面では中上級は初級に比べるとまだ不十分な点が多い。その背景として、話し言葉、書き言葉それぞれにおける基礎研究の欠如があげられる。中上級文型の使用実態の分析、使用頻度や使用場面に関する調査が行われていないため、現在のところ、中上級文型に関していえば、学習上の優先順位を決定するための根拠がないのである。

中上級文型の学習計画を立てるための基礎資料がないため、文型の提出順や運用練習に関する重み付けも教科書によってまちまちである。そうした状況の中で、担当教員は教科書の文型提示順に無批判に従うか、自分自身の直感に基づいて学習順序を決定する他ないといった状態が続いている。このような状況を改善するには、話し言葉、書き言葉それぞれについて実態調査を行い、基礎研究の成果を蓄積することが是非とも必要である。その上で、話し言葉として利用価値の高い文型を選定し、学習の優先順位について検討し教材化を行うことが上級レベルでの文型学習のために必要であると思う。

5.3. 語彙レベルと文型レベルを抑制した要因

スピーチの話者は日本人の大学生 (NS) と日本語能力試験一級取得者の学部留学生 (NNS) であり、中上級語彙・文型の知識と運用力は十分あるはずである。にもかかわらず、使用語彙・文型を見ると、初級が大部分を占め、NS と NNS との差もほとんど見られない。話者の日本語能力を勘案するならば、中上級語彙・文型の使用率が低い原因を話者の日本語運用力の乏しさに求めることは難しい。では、レベルを抑制した要因は何か。

話者が選択的に語彙も文型も平易なものを用いていたと考えることができるのではないだろうか。視覚的媒介物を全く用いない音声のみによる伝達場面では、同音異義語や発音の聞き取りにくい語、複雑すぎる文型は伝達を大きく阻害する。それを防ぐために同音異義語の多い漢語の使用を回避して近似の意味を持つ平易な語が選ばれ、また単純で誤解の生じにくい文型が積極的に選ばれた可能性が考えられる。聴衆に対する配慮が働き、音声言語として伝わりやすい言葉、聞き取りやすい言葉が意識的に選択されたのではないだろうか。つまり、スピーチでは話者が意識的に語彙・文型のレベルを抑制していたと考えられるのである。

もしそうであるとすれば、話者のコミュニケーション上の戦略の使用によるレベルの抑制であると考えることができる。これは、聞き手の反応を予想したり確かめたりしながら同時に自分自身の発話をモニターしつつ調整するという非常に複雑なメタレベルでの行動である。このような能力は、大学における研究・学習活動を支える上で非常に重要であると思う。

5.4. スピーチの開始部・終結部の構造

電話の会話分析などから、談話の開始部・終結部は定型化しやすいことが解明されている⁽¹⁴⁾。スピーチにおいても開始部・終結部ともに極めて定型的事であることが本研究のデータから明らかになった。特にスピーチの終結部は、「訴え・終了宣言・挨拶(謝辞)」の3要素のみから成り、その出現順はすべて一致していた。スピーチ開始部はやや複雑で、「挨拶・名乗り・開始宣言・前提確認・立場表明」の5要素の組み合わせにはバリエーションが見られたが、出現順は一致している。

スピーチ開始部は、聴衆との関係作りの上で、また聴衆と状況・前提条件の共有化を図る上で非常に重要な部分である。NNSの方がNSよりも

開始部が丁寧に構成されていたが、これは日本語教育の中で聞き手への関係作りを意識するべく指導を受け、談話構成に関しても意識的学習を積み重ねてきた結果であるといえるかもしれない。

このような談話の構造に関する指導は、担当教員の関心に基づいて部分的に上級レベルのプログラムの中に取り入れられているケースもあるが、学習者自身の関心や自然習得に任されている場合も少なくない。談話の構造に関しては、上級日本語教育における学習項目の一つとして取り上げていくことが可能であると思われる。NS についていえば、話し言葉に関する談話指導が意識的に行われることは極めて稀であり、普通自然習得に任されているように思われる。スピーチの談話に関しては、大学の学術場面における基礎スキルとして位置づけ指導することが可能であり、上級日本語の談話に関する発話教育から NS の大学生対象の教育へ還元が可能ではないかと思われる。

5. 5. 上級日本語教育への示唆

以上の考察から、上級日本語教育への示唆をまとめる。

上級語彙に関しては、使用される語彙は話題・テーマごとに大きく異なること、ネットワークを形成することが広く知られているが、本研究のデータからそれを確認することができた。日本語学習者の日本語使用目的と日本語使用環境に基づいて理解語彙と使用語彙を峻別することが特に上級の語彙教育の前提として必要不可欠であり、該当する語彙領域を戦略的に獲得するための学習設計が必要であることが分った。中上級語彙に関しては、産出言語として利用価値の高い語彙とその用法を選定することが必要であり、それを意識的に学習計画に組み込むことによって産出能力獲得に直結した指導ができるのではないかと思われる。また、初級語彙が多用されていることから、上級レベルにおける基本語彙の使用実態の解明、意味・用法の分析が必要であることも明らかになった。

スピーチで使われた文型は、NNS にとっても NS にとっても理解文型のうちのごく一部にすぎない。スピーチという言語行動に適した使い易い文型を選定することが可能であり、産出文型と理解文型を区別することが必要である。産出文型の重点的学習が、上級レベルでのスピーチにおける発話能力獲得を容易にするのではないかと思う。

また、スピーチの開始部・終結部の談話は定型的であること、談話に関

して意識的学習を積んできた NNS の方が丁寧に談話展開していることが明らかになった。これは今後 NS を対象とする発話教育に還元できる点である。

6. 今後の課題

大学生のスピーチにおける日本語使用実態の一端を、現在利用可能な分析ツールを用いて分析した。基礎調査が今までほとんど行われないうままプログラム開発や教材開発が行われてきたことを考えるならば、「大学での学習・研究活動を支える日本語」の実態の一端を示すという点で貢献できたのではないかと思う。言語資料の収集と分析の積み重ねが、上級日本語教育や「アカデミック・ジャパニーズ」のプログラム開発のために必要不可欠であると考えられる。

本研究では、スピーチで使用された初級語彙の分析、特に多義語の意味分析や基本動詞の用法分析は行うことができなかった。初級文型に関しても用法分析を行うことができなかった。また、フィラー・ポーズなど、スピーチの中の冗長的部分が聞き手に与える印象についても分析する意義があると思われるが、これにも触れることができなかった。文末表現の分析、スピーチの中核部分の談話構造の分析も課題として残されている。これらを今後の課題として、現在あるデータの分析を進めていきたい。

また、本研究では大学生のスピーチにおける日本語使用実態に関して、日本語教育の研究領域内からのみ検討するに留まった。日本語教育は外国語教育の一分野であることから、英語教育との対照研究が有効である。英語母語話者 (NS) と英語非母語話者 (NNS) の大学生の英語使用実態やアカデミック・スキルに関する先行研究の検討、プログラム開発の現状についても全く触れることができなかった。これも今後の課題としたい。

(本稿は、2004 年度日本語教育学会秋季大会における口頭発表の内容に基づき、その一部分を大幅に加筆したものである。)

注

- (1) 「インタビュー形式による日本語会話データベース」は、日本語母語話者 50 名、日本語非母語話者 50 名の被験者に対して行われたロールプレイを含むイ

- ンタビュー実験のビデオ，音声，書き起こしテキストで，北九州市立大学国際環境工学部情報メディア工学科上村研究室によって公開されている。
- (2) 門倉 (2003) にアカデミック・ジャパニーズに関するテキストの年代順リストがある (p. 120)。
 - (3) 「2004 年日本語教育国際研究大会」は，社団法人日本語教育学会，独立行政法人国際交流基金，独立行政法人国立国語研究所の共同主催で，オーストラリア日本研究学会，中国日語教学研究会，香港日本語教育研究会，韓国日本学会，台湾日語教育学会，全米日本語教師協会ほかの協力の下で 2004 年 8 月に東京で開催された。
 - (4) 「2004 年日本語教育国際研究大会ワークショップ・セッション 3 アカデミック・ジャパニーズ」のコーディネーター（門倉正美・堀井恵子・曹大峰・鄭起永）による資料。
 - (5) 日本語能力試験出題基準では，文法事項を下位分類し，「日本語教育における主な文法事項といえは，・構文／文型 ・活用 ・助詞，助動詞，接辞 など（いわゆる文法的なく機能語）の類）の用法の三つをあげることができるであろう」とした上で，一・二級では「高度なく機能語」の類を数多く習得して正確に使うこと」が重要であるとしている。しかしながら，一般に中上級の文法事項は表現文型あるいは単に中上級文型と呼ばれているため，本稿でも中上級の文法事項をまとめて「中上級文型」呼ぶこととする。
 - (6) 但し日本語能力試験出題基準には，基本動詞の用法別レベルに関する記述，多義語の意味別レベルに関する記述がない。
 - (7) ディベートの学習上の効果に関しては高木・富谷 (2004) 参照。
 - (8) Reading Tutor は，川村よし子（東京国際大学）・北村 達也（静岡大学・現 ATR）によって開発された日本語学習者のための日本語学習支援システムで，東京国際大学のホームページ上で公開されている。語彙チェッカーでは，テキストの語彙レベル判定を行うことができる。語彙チェッカーの形態素解析には奈良先端科学技術大学院大学松本研究室によって開発された「茶釜 2.02」を，語彙レベル判定基準としては『日本語能力試験出題基準』をそれぞれ利用している。
 - (9) 極めて自発性の高い自然発話をデータとして収集することはできたが，その反面，制限時間外のスピーチも 3 例あり，ディベートでの役割固有の特徴もデータに反映しているなど，基本的な条件から外れるデータも含まれている。
 - (10) NNS のスピーチが聞き手に負担を強いる原因は，フィラー・ポーズ・自己訂正など冗長的部分の処理の違いにあると考えられる（富谷 2004）。
 - (11) Reading Tutor 語彙チェッカーは，文型部分を含む全テキストを対象としてレベル判定を行う。本稿における表・グラフの数値は Reading Tutor 語彙チェッカーによる数値であり，フィラー等を除いたテキストを 100% とした場合の各レベルの占有率を示す。従って文型の要素となる語もその数値の中に

含まれている。

- (12) スピーチでの使用されたリスト外語彙一覧 (NNS・NS 別) を資料 1 に示した。但しこの一覧は、Reading Tutor 語彙チェッカーによってリスト外語彙と認められた語彙一覧の中から、中上級文型・フィラー・意味判別不能部分を除いたものである。
- (13) 「べきだ」の使用頻度が高いのは、スピーチがディベートの一環として行われたものであり、そのテーマが「～べきだ」と設定されていたためだと思われる。
- (14) 岡本 (1990), 橋内 (1999) 参照。

参考文献

- アカデミックジャパニーズ研究会 (2001)『大学・大学院留学生の日本語 ①読解編 ②作文編 ③論文読解編 ④論文作成編』アルク
- 安藤淑子 (2002)「上級レベルの作文指導における接続詞の扱いについて—一文系論文に用いられる接続詞語彙調査を通して—」『日本語教育』115号 日本語教育学会
- 飯野清士・中渡瀬誠・丸谷しのぶ・山田あき子・和田三郎 (1992)『キャンパス・ジャパニーズ』専門教育出版
- 宇佐美まゆみ (1997)『基本的な文字化の原則 (BTSJ) の開発について』文部省科学研究費基礎研究 (C) 研究結果報告書
- 岡部悦子 (2002)「高校生と交換留学生のコミュニケーションの分析—協同的課題解決場面を事例として—」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』第 15 号
- 岡本能里子 (1990)「電話による会話終結の研究」『日本語教育』72 号
- 学習技術研究会 (2002)『知へのステップ—大学生からのスタディ・スキルズ—』くろしお出版
- 門倉正美 (研究代表者) (2003)『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ 日本留学試験が日本語教育に及ぼす影響に関する調査・研究—国内外の大学入学前の日本語予備教育と大学日本語教育の連携のもとに—』平成 14～16 年度科学研究費補助金基盤研究 (A) 研究成果中間報告書
- 鎌田修・梶本総子・富山佳子・宮谷敦美・山本真知子 1998『中級から上級への日本語』ジャパントイズム
- 工藤真由美 (1999)『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』ひつじ書房
- 倉八順子 (1997)『日本語の表現技術 読解と作文上級』古今書院
- グループ・ジャマシイ編著 (1998)『日本語文型辞典』くろしお出版
- 国際交流基金編著 (2002)『日本語能力試験出題基準 改訂版』凡人社
- 国立国語研究所 (1989)『国立国語研究所報告 98 児童の作文使用語彙』東京書籍

- 国立国語研究所 (2002)『国立国語研究所報告 118 学校の中の敬語 1—アンケート調査編—』三省堂
- 国立国語研究所 (2003)『国立国語研究所報告 120 学校の中の敬語 2—面接調査編—』三省堂
- 駒田聡・佐藤恭子・鈴木睦・砂川有里子・三牧陽子編 (1990)『中上級日本語教科書 文型索引』くろしお出版
- 近藤安月子・丸山千歌 (2002)『日本への招待』東京大学出版会
- 斉山弥生・沖田弓子 (1996)『研究発表の方法』凡人社
- 佐々木薫・田口典子・安藤節子・赤木浩文・草野宗子 (2001)『トピックによる日本語総合演習／中級前期・中級後期・上級・上級用資料集』スリーエーネットワーク
- 佐々木瑞枝・村澤慶昭・細井和代・藤尾喜代子 (2001)『大学で学ぶためのアカデミック・ジャパニーズ』ジャパントイムズ
- 佐々木瑞枝・横浜日本語研究会 (2000)『日本語パワーアップ総合問題集』ジャパントイムズ
- 産能短期大学日本語教育研究室編 青木直子・鬼木和子著 (1990)『講義を聞く技術』産能大学出版部
- 産能短期大学日本語教育研究室編 斉山弥生・富谷玲子・土井真美・牧田吉章著 (1988)『大学生のための日本語』産能大学出版部
- 白川博之監修 (2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 高木南欧子・富谷玲子 (2004)「接触場面での協同学習によるディベート—大学学部留学生を対象とした上級日本語教育の試み—」『日本語教育学会 2004 年度研究集会 (第 5 回) 実践研究フォーラム予稿集』日本語教育学会
- 富谷玲子 (2004)「大学生のスピーチにおける日本語使用実態の分析—日本語非母語話者と日本語母語話者の比較—」『2004 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
- 友松悦子・宮本淳・和栗雅子 (1996)『どんな時どう使う日本語表現文型 500』アルク
- 二通信子・佐藤不二子 (2000)『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
- 橋内武 (1999)『ディスコース 談話の織りなす世界』くろしお出版
- 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 (1997)『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版
- 一二三朋子 (1996)「年少者の語彙習得過程と言語使用状況に関する考察—在日ベトナム人子弟の場合—」『日本語教育』90 号 日本語教育学会
- ピロッタ丸山淳 (1996)『大学の授業へのパスポート』凡人社
- 松本恭子 (1999)「ある中国人児童の来日一年間の語彙習得—発話資料のケーススタ

ディ：形態素レベルの分析」『日本語教育 102 号』日本語教育学会
 三浦昭・岡まゆみ (1998)『中・上級者のための速読の日本語』ジャパントイズ
 村岡貴子・影廣陽子・柳智博 (1997)「農学系 8 学術雑誌における日本語論文の語彙
 調査」『日本語教育』95 号 日本語教育学会
 山根智恵 (2002)『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
 山本富美子編著 (2001)『国境を越えて』新曜社

『インタビュー形式による日本語会話データベース』

(<http://www.env.kitakyu-u.ac.jp/corpus/>)

『茶漉』日本語用例・コロケーション抽出システム (一般公開版)

(<http://prairie.lang.nagoya-u.ac.jp/chakoshipub.html>)

『日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース』ver.2正式
 公開版 国立国語研究所

(<http://www2.kokken.go.jp/~smudr/public/sakubun/>)

『日本語話し言葉コーパス』国立国語研究所

(<http://www2.kokken.go.jp/~csj/public/>)

『Reading Tutor』 (<http://language.tiu.ac.jp/about.html>)

資料1 スピーチで使用されたリスト外語彙一覧

(数値は NNS 6 名 NS 4 名の使用回数)

テーマ A

	NNS 使用回数	NS 使用回数	全 使用回数				
ボランティア	45	34	79	学費		1	1
自発	7	7	14	割く		1	1
～先	2	7	9	あまりに		1	1
実体験	6		6	やらず		1	1
やる気	2	3	5	だらだら		1	1
高齢者	2	1	3	反駁		1	1
そうすると	2	1	3	悪影響		1	1
食費		3	3	モチベーション		1	1
本義	2		2	不快		1	1
認定		2	2	献血		1	1
無償		2	2	ルーム		1	1
放課後		2	2	介助		1	1
人々	1	1	2	バザー		1	1
そのもの	1		1	阪神淡路大震災		1	1
捉える	1		1	半数		1	1
そしたら	1		1	関わる		1	1
人数	1		1	(人名 A)	1		1
うなぎのぼり	1		1	(人名 B)		1	1
迷惑千万	1		1	(合計)	90	81	171
百害	1		1				
内申	1		1				
まっしぐら	1		1				
阪神大震災	1		1				
かったるい	1		1				
空き缶	1		1				
画一的	1		1				
だからこそ	1		1				
義務付ける	1		1				
立論	1		1				
ALS	1		1				
バイト	1		1				
時給	1		1				
思いやり		1	1				

テーマB

	NNS 使用回数	NS 使用回数	全 使用回数
コンビニ	11	13	24
自販機	10	9	19
未成年	4	13	17
いろんな	4	4	8
喫煙	1	5	6
飲酒		5	5
利便	3	2	5
対人		4	4
反駁		3	3
違法		2	2
クリア		2	2
人件費	1	1	2
層	2		2
ちょちょい		2	2
判明	2		2
両面	2		2
(人名C)		2	2
(人名D)	2		2
(人名E)	1		1
ID		1	1
言い換える	1		1
いきわたる		1	1
いくつか	1		1
一段落	1		1
一服	1		1
今や	1		1
うなぎのぼり	1		1
埋め合わせ	1		1
おしまい	1		1
思い	1		1
神奈川	1		1
減	1		1
こないだ	1		1

こうむる		1	1
国内		1	1
(人名F)	1		1
残業	1		1
自社	1		1
しっとり		1	1
車両		1	1
酒税	1		1
先決		1	1
そうすると		1	1
それなりに	1		1
大量	1		1
だからこそ	1		1
痴呆		1	1
店舗	1		1
店頭		1	1
どうのこうの		1	1
どういう		1	1
取り込む	1		1
取り込み	1		1
ニーズ	1		1
年少		1	1
走り回る		1	1
一口	1		1
暴走族		1	1
暴言		1	1
見極める		1	1
免疫		1	1
(合計)	66	85	151

資料2 スピーチで使用された中上級文型 (A・Bはテーマを、数値は使用回数を示す)

級別	中上級文型	NNS/A	NS/A	NNS/B	NS/B	合計
1	(ただ)～だけで／じゃ／なく	2	1	1	1	5
2	とか～φ	1	6	9	6	22
2	べきだ	6	7	5	1	19
2	について	4	3	1	6	14
2	として	4	2	4	1	11
2	によって	5	2		2	9
2	ように		1	1	5	7
2	だけ	1	3	2		6
2	に対して	2	2	2		6
2	ような	4	1			5
2	など	1	3			4
2	にとって		2		2	4
2	から見ると	1		2		3
2	に基づく	3				3
2	くらい	1			1	2
2	こそ	1		1		2
2	ことから	1	1			2
2	ことになる		2			2
2	っていうのは	1			1	2
2	とおりに	2				2
2	とか～とか			2		2
2	とは		2			2
2	において		1		1	2
2	における	1			1	2
2	によると	1		1		2
2	うえで		1			1
2	しかない			1		1
2	つつ			1		1
2	ということだ	1				1
2	というと				1	1
2	というのは				1	1
2	としたら	1				1
2	とすると	1				1
2	なんか				1	1
2	なんて				1	1
2	に対する			1		1
2	に基づいて	1				1
2	による			1		1
2	ばかりだ	1				1
2	わけだ		1			1
2	わけではない			1		1
	(合計)	47	41	36	32	156